

平成 元年 2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

ムラを通過していく人々

市指定有形文化財である「市川家日記」(『日本庶民生活資料集成』12 三一書房)には、芝居・角力^{すもう}などの興行の記事がしばしば見られる。例えば、文久3年(1863)8月25日、「～富岡村中、長澤川腹にて芝居有。～」。

ムラ社会内で進行していく日常の生活は閉鎖性がかなり高かったようで、それは「～隣部落の地理も知らず、よその人とは、交際もないのが普通」(山川菊栄著『わが住む村』岩波文庫)という民俗事例に端的にあらわれている。そんなムラ社会に刺激を加え、活力を与える役割を果たしたのが、芸能者であった。

混沌の中から生まれて出てくる芸術、とりわけ(日本では中世以来、)芸術は河原を舞台として行われたので、芸能者は河原者と呼ばれ、その一部は歌舞伎となって消費社会=都市で発展していった。先の「市川家日記」にみられた「河原での芝居」は、この習俗の流れを汲んだものと言えよう。彼らは、身分的には虐げられていたが、ムラ社会にとっては、異界との数少ない接触の機会だったので、格別の魅力を感じたことだろう。時代は下がるが、川端康成著『伊豆の踊り子』はその格好の具体例であろう。

定住社会を通過していく人達は、芸能者ばかりではなかった。まず、御師がそうである。御師は、ムラ社会に神聖な信仰の空気を伝えてまわる人々である。武蔵御嶽神社付近には多くの御師が現在も生活していることは、周知の通りである。

最後に、サンカ(山窩)と呼ばれる人達がいる。主に箕などの竹細工の技術を持ち、農家に売ったり食糧と交換したりして生活していた。彼らは芸能者や御師とは全く異なり、主に山中を移動漂泊しており、定住生活を営まなかった。すなわち、定住生活とは全く別の生活習俗を持っていた。したがって記録として残るものがほとんどなく、その実態は不明な点が多い。

しかし、彼らとムラ社会との接触がわずかであればそれだけ、彼らから受ける独特の雰囲気は、新鮮さもしくは神聖さを増したことであろう。

[参考文献] 宮本常一著 『忘れられた日本人』 岩波文庫

田中勝也著 『サンカ研究』 新泉社

桜井徳太郎著 『結衆の原点』 弘文堂

網野善彦著 『河原にできた中世の町』 岩波文庫

(文責 橋上一彦)